

農業と福祉の連携（農福連携）による 新たな共生と地域コミュニティの創出 〜多様性を受容する社会を目指して〜

要旨

農福連携を実践する農業・福祉サイドの事業者、両者をつなぐコーディネーター、障がいを持った当事者が登壇し、障がい者が農業に取り組みにあたっての留意点、障がい者が農業に取り組むことで生じる変化について語り合った。農作業を通じて心身の安定が図られたり、コミュニケーション能力が養われたりすることが利点であるが、同時に新規に参加する福祉施設の開拓や、農業技術を持った福祉施設職員の養成が課題として挙げられた。今後農業と福祉にとどまらず、「農福+α連携」に発展することを見据え、安定的な販路を確保し、障がい者福祉の視点ではなく、よいものだから買ってもらえる商品づくりを目指すことや、他産業や企業とも柔軟に連携し、新たな農業経営のあり方を考えることの必要性が指摘された。

1. 障がい者が農業に 取り組むにあたって

濱田：それでは、後半のシンポジウムを始めます。中村さんは、農業経験のない障がい者の方が初めて来たときに困ったことや、施設側で注意していることはありますか。

中村：障がい者は、コミュニケーションに慣れ



中村 邦子氏

てないというか、苦手な方が多いです。農作業は決して1人ではできません。共同作業の経験を通じて、社会に出るのを支援することが私たちの目的です。社会に出てから、コミュニケーション能力がないために孤独感を味わい、挫折して施設に帰って来るケースも少なくありません。農作業を通して人の助けを求める、自分できないことがあるときは声を掛け合う。自然の中で農業をし、グループで協力し合うことで、少しずつ自分から言葉を発するようになる。農作業は障がい者のコミュニケーションを訓練し、ハンデを克服する場でもあると思います。

濱田：逆に鈴木さんは、障がい者を雇う立場として、どんなことがありましたか。

鈴木：私の農園では、必ず地域の障害者就業・生活支援センターを通して採用しますので、ある程度トレーニングを積んだ人が来ます。あとは、福祉の人たちの工夫でいろいろなことを乗

り切ってきました。

以前福祉の人たちから、「精神障がいを持った人たちは、1人ではなく3人以上セットの雇用ですから」と言われました。私は絶対嘘だ、1人でも多く送り出したかったのでまとめて受けろと言っているのだ、毘だと思って「1人でいいですよ」と答えましたが、要は、一つの仕事を複数人で取り組むグループ就労により、彼らの



鈴木 厚志氏

能力を活かす工夫を提案してくれたのでした。

私たちはそれぞれの障がいの特性が分からない。逆に言うと、特性を理解している人たちが正しい情報をもらえば、私たちは彼らが一番働きやすい現場を用意できます。事前のやりとりがあったおかげで、特別困ったこともなくスタートが切れたという意味では、うまくいっていると思います。

濱田..先ほど厚生労働省から就労系障害福祉サービスのお話がありました。それ以外に、障がい者の就職を斡旋したり、障がい者からの相談を受けたり、事業所との結びつきを仲介する就業センターという施設があります。鈴木さんはそういうところに相談されたんですね。これは、白鳩会が先進的に取り組んでいます。今後障がい者施設が農業を始めるとき、どのような課題があると思いますか。

中村..私たちの施設では、農業技術を持った職
依頼は、ほぼ毎日あります。平成23年から
にく関係の作業をメインで行っていますが、
んにくが5か月、それ以外の7か月、特に冬場
は大規模農家の仕事がほとんどです。西讃の大
規模農家は、レタス、ブロッコリー、タマネギ、
キャベツなど、いろいろな種類をつくっていま
す。中讃と東讃では青ねぎが中心です。
大規模農家の所へは、近くの施設に優先して
行ってもらいます。東讃の農家には東讃の施設、
中讃の農家には中讃の施設が行くのが基本です。
私だけで募集をかけるのはほぼ限界で、今年度
は香川県の農業生産流通課にお願いして動い
てもらいました。参加施設は、エリア内の障がい
者施設に集まってもらい、私が農福連携につい
て説明します。東讃では来年からブロッコリー
の定植依頼がありますが、できる施設を増やす
ための段取りをしています。

阿部..新しい施設に参加してもらうときは、最
初は私が各施設に直接足を運んで説明して、3
年間で14施設増やしたのですが、実は10施設
減って現在33施設（平成30年度末）です。中に
は、年間最低2日間とか、種子割の時期の1か
月間だけ参加する施設もあります。農家からの

濱田..障がい者の方に仕事をしていただく前に、

障がい者自身がどのような仕事ができるのか、現場でどのような農業をするのかを、施設の職員が理解する。あるいは、職員自身が農業技術を持ち、さらに経営的な面も意識することが重要ということでしょうか。

中村：そうですね。香川県のように中間施設を通して、自分たちが経験したことのない農作業が委託されたとき、挑戦する前に基本的な知識や技術を教えてもらえる機関があったら取り組みやすいと思います。私たちも請負契約にあたり、「南大隅町ブロンズ人材センター」から地域農業の困りごとへの対応依頼がありました。ただし、幅広い知識がないと仕事を引き受けることはできません。

濱田：京丸園の鈴木さんはNPO法人「しずおかユニバーサル園芸ネットワーク」を設立し、人材育成的な取り組みをしてきました。

鈴木：私たちは農業と福祉をつなげるために中ようとすると、当然、技術を持った人が必要になります。私たちは、農業技術のある人がいるという前提であれば、農家のおやじの通訳代わりがいれば十分だろうと考え、結局その事業はなくなりました。

濱田：農林水産省の平成31年度からの施策に人材育成が入っており、中間支援団体をつくって支援するそうです。実際に福祉の現場の方が農業をするのは大変ですので、私は各都道府県にある農業大学校で人材育成プログラムを提供することを提案しています。三重県や島根県に近い事例がありますが、既存の施設や人材でできると思います。もう一つはJAが、社会貢献の一環として人材育成に関係してくれば、そんなにお金がかからずに何かできるかもしれないと考えます。

2. 農業「取り組む」で生じる変化

濱田：農業生産者としての鈴木さんに改めてお

問支援組織が必要と考え人材育成を試みましたが、必要ないという結論に至りました。中間支援組織をつくると、次は雇用の確保、つまり誰が給料を出すのかという現実的な問題が発生します。農園も福祉施設側も払えないのでは運営できませんし、中間支援組織がないと成り立たないのでは意味がない。結局、企業の力を借りようという話になりました。

農業技術の知識への要望はありましたが、問題はそれぞれ異なるため、結局マニュアル化できなかつたのが本当のところ。要は「農家のおやじの通訳ができる人」、農家のおやじに寄り添い、「この草ちよつと取って置いて」という意味ですね？と整理できる人が農業現場にいれば十分、となつたのです。

当初は「農業ジョブコーチ」を育成する計画でしたが、結局、障がいを持った人たちのサポートができれば十分ではないか。普通農業を始め

聞きます。障がい者を雇用して本当に困ってしまったことはありませんか。

鈴木：私の農場では、人に迷惑をかけないというルールがあります。障がいがあるからといって、人にかみついたり引つかいたりするのはアウトです。逆に自分で自分を殴るのはOKです。人に迷惑をかけていませんから。

以前気分が落ち着かないので、自分で自分を殴る子がいきました。鼻血が出るほど殴っていたので、これは危ないと思います、「そろそろやめたほうがいいんじゃない？」と声をかけてしまったのです。声をかけると余計状態が悪くなり、「ワーツ」と叫びながら道路に飛び出しそうになった。車に轢かれては危ないので、その子を投げ倒して馬乗りになって押さえつけました。すると通行人が目の前を通りました。私の人生は完全に終わりました（笑）。間違いなく障がい者虐待ですね。押さえつけられている子は、

顔がボコボコで、鼻血を出して泣きわめいている。その子を押さえつけている経営者はどうすればいいのでしょうか？結局通行人は近所の人たちで、「そういう子がいるよね」と理解してもらえたので助かったのですが、それが一番困ったケースでした。

濱田：鈴木さんの場合は、普通の人なら課題と考えることを課題としてではなく、そのときど



阿部 隆弘氏

成果だと思えます。離職率のデータはありませんが、基本辞めません。精神障がいがあつてよく眠れず、睡眠薬を飲んで日中頭がボーッとしていた子たちが、農業現場に出て体を動かし、強い日光を浴びて汗をかくことにより、薬を1錠減らせることが分かってきています。結果どれだけ自分たちの体が楽になるのかという手応えは持っているようです。決して障がいが出るわけではないが、少しでも睡眠時間が長くなるのは、彼らにとって非常に価値があることです。その点は、農業分野の一つの大きな効果かなと思います。

濱田：白鳩会には、「触法障害者」などいろいろな方がいらっしゃいますが、いかがでしょう。中村：知的障がい者は基本的に、100%療育手帳を所持しています。しかし最初から福祉サービスで守られなかった方々が、生きるために万引きや空き家に入って法を犯し、刑務所の

きで解決方法を考える。鈴木さんの10年前の課題と今の課題はたぶん全然違うと思います。鈴木さんのような思考があれば、農業も変革できるのではないかと思います。

障がい者の方が農業に取り組んで、障がい者自身の精神や肉体に何か変化がありましたか。

阿部：農作業に参加して、できるが増えるのと、だんだん自信がついてきます。秋はキントキニンジンの収穫やみかんの袋詰めがあります。私がそういう時期に障がい者の人に会うと、「阿部さん、ぼつぼつあの作業が始まるんじゃないの？」と尋ねられます。今年もまた役立ちたいと考える人からは、「早く仕事（の依頼）を言ってね」と言われます。農家から「ありがとう」と言ってもらえると、利用者は気持ちよく次の作業に取り組めるように思います。

鈴木：彼らは休まず毎日来てくれるのが大きな

お世話になったが、出所後行き場がないことが多々あるのです。そういう方たちを「触法障害者」と呼びますが、私たちは8年ぐらい前から受け入れています。彼らの能力は非常に高いのですが、コミュニケーションや自己主張ができないばかりに、刑務所に送られてしまった。行き場がないために、障がい者というカテゴリーに入らざるを得なかったのです。ある意味、私たちの社会がそういう方たちをつくり出していることに原因があります。

彼らはみんなと一緒に農作業をすることで、表情が全く違ってくるのです。排除される経験をしてきたので、最初のうちは信頼関係を結ぶこと自体、非常に厳しいものがあります。例えば殻にこもるとか、絶対にここを出てやろうと目をギラギラさせている感じ。それがみんなと同じように汗をかき、同じ釜の飯を食べ、生活のサイクルを昼夜逆転から戻し、人間らし

い表情や心を持てるようになることは、農業の大きなメリットだと思います。

鈴木さんがおっしゃったとおり、障がいはいりません。一生付き合っていかなければならない障がいを持つ彼らに、私たちは何か生きるすべを提供できたら…と考えます。

3. 農業界は変わらなければならぬ

濱田…理事長、今までいろいろとお話を聞いて、少し感想を含めてコメントをお願いします。

内藤…農福連携に取り組んだときに農業サイドにどういうメリットがあるのかなと考えていますが、きょう鈴木さんから具体的な成果というか、気付きのようなものについてお話ししていただいで、大変参考になりました。

今、農業界は非常に担い手・労働力不足で、外国人労働者も受け入れようという声もあがっていますが、そもそも、農業界で求人をして

人が来てくれないのはなぜでしょうか。今までどおり、一言指示しただけで作業をしてくれる人に来てほしいが、そういう人は来てくれない。大学生のアルバイトを募集しても、誰も来てくれない。要は、募集方法や必要とされる人材が変化している現状に鈍感だったのではないのでしょうか。必要な人材はわかるかもしれないが、来る人は変化している。そこで求人方法なり、どういう働き手が必要なのかを考え直さないといけないのではないのでしょうか。

障がい者の方に働いてもらうというのは、明らかに違った視点を生産現場に提示してくれるわけです。どの地域でもとりあえずやってみると、多くの気づきがあつて、人材確保の道が開けてくるのではないかと思います。

あと、農業界は今まで、ジョブトレーニングのように目に見えないサービスにお金を払うという風潮がないものですから、単に幹旋やアド

バイスに対して農業者がお金を払うことはあまり期待できません。中間組織やそこで働く人を支えていくのは、国の補助金なしでは無理かもしれません。これらを継続的にやるとすれば、働き手が必要とする農業者自身が変わらなければいけないのではないのでしょうか。

4. 白鳩会・花の木ファーム 利用者の声

濱田…これまでのやりとりで、障がいを持つ方の可能性を感じていただけたと思います。今日は白鳩会・花の木ファームから、障がいをお持ちの当事者、中督さんと外堀さんをお呼びしています。どうぞ壇上にご登壇ください。いつもは作業着ですが、スーツ姿でビシッと決めて来られました。では、自己紹介と、普段どんなお仕事をしているかお話ししていただけますか。

中督…中督剛なかがみつよしです。お茶をつくっています。

外堀…外堀光希ほかほりこうきと申します。去年の11月まで二シフトにいて、12月からレストランで働いています。

濱田…中督さんは農業を始めて何年ですか。

中督…30年です。

濱田…すごい。ひよっとしたら、重機も操縦さ



内藤 邦男



れたりしますか。

中督..はい、できます。

濱田..中村さん、補足をお願いします。

中村..私は短大を卒業して20歳で入職しましたが、中督さんは沖永良部島の出身で、同じ年の4月に入所しました。本当に同じ年齢を重ねているということ。最初はセメント瓦をつくっていて、手先が器用で、機械が大好きなんです。機械に興味があることを活かした作業を農業に取り入れて、最初は小さな機械でしたが、今では大型の乗用機まで運転をしております。

濱田..中督さんは大きな機械を操縦したいと自分から思ったのですか。

中督..はい。

濱田..お茶の葉を収穫する機械を一人で操縦されるのですか。

中督..はい、できます。

濱田..私が初めて白鳩会に行ったときに、中督

さんのような方が重機を操縦していました。知的障がい者は繰り返し作業が向いていて、自分で判断することは難しいといわれますが、中督さんのような方が働いていたのです。これを見た瞬間に、障がいを持つている方の可能性はすごいなと思いました。外堀さんは、どのような経緯で入所したのですか。

外堀..申木野養護学校から花の木ファームに入りました。

濱田..今、レストランではどんなお仕事をされているのですか。

外堀..接客や、注文に応じて盛り付けをしたり肉を出したりして、皿洗いもしています。

濱田..接客って、普通にウェイターをやるのですか。注文を取るとか。

外堀..はい、そうです。

濱田..すごいですね。では、お二人にそれぞれ

聞きたいのですが、中督さんは、今まで作業をして一番大変だったこと、あるいはうれしかったこと、両方あれば教えてください。

中督..苦しかったことは、最初、機械の操縦ができなくて、一回機械を畑から土手に落としてしまつて、もう死ぬのかなと思つたけど、大丈夫でした(笑)。うれしかったことは、島にお母さんと弟がいるんですけど、セルプに入ったときは10年ぐらい連絡が取れなくて、職員の人たちにどうしても家に帰りたいと言いました。今は1年に1回島に帰るんですけど、それが一番うれしかったです。

濱田..久しぶりに会つて話をして...?

中督..はい。

濱田..よかったですね。では外堀さんどうぞ。

外堀..農作業では、とにかく病気になるたびに処理が大変だとか、あと、出荷するときに、1トンや5トンの出荷をするので、その準備と

か削り方が忙しいです。レストランでは、料理によって盛り付けが違うので、盛り付け方を覚えるのが大変でした。

農作業では、にんにくがたくさん売れてうれしいし、レストランでは、お客さんが「また来るね。おいしかった」と言ったら笑顔で帰ってくれたら、うれしいです。

濱田…例えば、下請けで部分的な作業をしていると、自分が何をしているのか分からなくなることがありますが、実際につくったり販売したりすると、感謝されたりするので自分が何をしているのか分かります。それは自己有用感を高めることにすこくつながるんですね。今のお二人の話は、機械を転がしたという話は初めて聞きましたが、すごいですね。

最後に、これから自分でどんなことをしていきたいですか。

中督…これからは、白鳩会でもうちよつと勉強

京丸園の鈴木さんには、「売上は上昇していますが、作付面積は拡大しているのですか」「それぞれの障がい者のレベルに対して、作業の指示書のようなものを具体的に作成しているのですか」という質問が来ています。

鈴木…京丸園は障がい者雇用でも増え、売上に比例して面積も拡大しています。新しい仕事を始める都度、具体的な作業指示書が必要になります。京丸園はGAPを取り入れていて、障がい者の関与の有無に関係なく、作業工程やリスク管理を明確にしています。

濱田…阿部さんには、JAとつながったきっかけや経緯について質問が来ています。

阿部…香川県の場合は、県の二つの課が同時に困っていたとき、JAから情報提供してもらったのが発端のようです。私は、当時を知るJAの担当者から、県の依頼でJAが情報提供したと聞いています。県からも、JAが動きやすい

をして、一般に出て働きたいと思っています。

濱田…すごい。拍手ものですね。(会場拍手) ぜひ、頑張ってください。

外堀…花の木農場で経験したことを、一般のところで働いて活かしていきたいです。もう一つは、地元に戻って、畑を借りて、自分で育てて売りたいなと思っています(会場拍手)。

濱田…頼もしいですね。労働力ではなく担い手になってくれそうな感じですね。お二人にはこれから頑張ってください。白鳩会にはさらに新しいことに取り組んでいただいて、ぜひ私に教えてください。そうしたら、私は講演で、全国各地の皆さんにお伝えします。ありがとうございます。

5. 質疑応答

濱田…ここからは、会場からのご質問にお答えしていきたいと思います。

ようにお願ひしたと聞きました。

濱田…「香川県で、阿部さんのようなコーディネーターは何人いますか」「パソコンでスケジュール調整、関係者への連絡はできるのですか」という質問も来ています。

阿部…農業のコーディネーターは私一人です。日々の天候に応じて調整しています。県内全域が雨、あるいは東讃と西讃のどちらかで作業可能な場合は、当日の朝、中讃エリアの施設から行ける農家に仕事を振っています。

パソコンでのスケジュール調整について、私の前任者は年間計画をつくっていましたが、農家・施設双方にとって分かりやすいものではありませんでした。そこである企業にお願いしてシステムをつくってもらい、スケジュール管理だけでなく、工賃の計算までできるように改善しました。私はこれをもとに請求書を作成し、障がい者施設および農家に送るわけです。

濱田：香川県は日本で一番面積の狭い県ですが、さすがに阿部さん一人ではこなし切れなくなっています。最近は県内を3〜6か所の圏域に分け、それぞれにコーディネーターを配置している県も出てきています。そうしないと、もしものときに回らなくなります。

6. 「いろいろだから買ってもいい」のせびんを叩く

濱田：農福+a連携への課題として、安定的な販路の確保があります。大企業に販売するには、大量生産の必要があります。かなりハードルが高いです。全国各地で農福連携の商品を売るマルシェも開催されていますが、そのときだけという感じがしなくありません。そういう意味では農福商連携も広がればよいと思いますが、販路について中村さんにお聞きします。

中村：福祉業界にとって販売出口は、非常に苦

手としている部分です。就労事業が福祉業界に入ってきたのが昭和60年頃ですが、生産したのはいいが、どうやって市場に出すのかというのが一番苦手です。まずは私たちのことを知ってもらおうと、自前でアンテナショップやレストラン等を開き、名前を売ることから始めました。そして少しずつ小口のお客様を増やしていきました。地元のJAや生協が、社会貢献や福祉の視点から、私たちの商品を扱ってくださるようになったことが、一番大きな出口となるきっかけになりました。

障がい者施設がつくった商品を、一般市場がかわいそうだからではなく、いいものだから扱ってくれるようになるよう、私たちは京丸園などを参考にしながら少しずつ勉強していきたくと思っています。

濱田：白鳩会は、たしかGAPを取ったんでしたっけ？これから取るんですか？

中村：認証を受けるための準備をしています。^(*)

濱田：鈴木さんからもお願いします。

鈴木：私たちは農業畑ですので、JAとして全国の市場との協力が第一だと思います。農業と福祉だけで課題解決できないことは分かっています、そのとき企業の力をどうやって取り込み、関係性をつくっていくかというのは、大きなテーマになっています。浜松では、IT企業「伊藤忠テクノソリューションズ(CTC)」^(*)と組んでいます。もし飲食業、例えばファミリールストランを運営している特例子会社との連携であれば、私たちが生産している野菜が活用される可能性は非常に高くなります。CTCも社内の給茶機のお茶や、ノベルティやギフトに農産物を活用するなど、協力してくれています。企業連携の中に農産物の販売もセットで、障がい者雇用の観点と農業の応援という企業のコンセプトが入り込むことによって、企業と一緒に



口も解決できる可能性は非常に高まっていると感じます。

濱田・鈴木さんの商品も、「障がい者」や「福祉」という言葉はパッケージのどこにも書いてありません。高品質のものを、障がい者の特性に合った仕事を環境整備して作ってきました。鹿児島市にはドルフィンポートという複合商業施設があります。白鳩会はそこで、障がい者の施設であることはうたわずに普通に商品を買っています。中村さんがおっしゃったように、いい商品だから買ってもらえる。しかしそこには、当たり前のように障がいを持った人もいるというのが、これから目指すところだと思います。

鈴木さんは、企業との農福産（業）連携の取組みをしています。ご説明をお願いします。

鈴木・農業現場は規模が小さすぎたり、制度が整っていないかったりして、障がい者をいきなり雇用できません。企業は法定雇用率を達成した

と農業生産者をマッチングするモデルです。「ひなり」の本体は東京にあり、ブランチを浜松におき、浜松市の障がい者を30名雇用し農作業の請負をしています。東京では、障がい者の獲得競争が激しく、軽度・中度の雇用は進んでいません。「ひなり」は地域を越え、農村の障がい者を雇用して、地域農業を支える受委託モデルです。企業と連携し、生産物をいろいろな形で売



濱田 健司

いという大命題がありますから、まず企業に障がいを持った人たちを雇用していただき、企業と農園が作業委託契約を結びます。そうすれば農園は、障がいを持った人たちを雇用せずに済みます。農園では農作業を分解し、単価を付け、障がいを持った人たちに作業してもらいます。そうすれば、障がいを持った人たちの支援は企業でやってくれるので、私たちは生産に特化できます。企業の力をどれだけ農業分野に借りられるか、仕組みづくりが始まっています。

CTCの特例子会社「ひなり」^(*)では、現在障がいを持った人たちが約30名浜松で雇用され、請負の協力農家として8軒登録されています。30名が毎日、作業をしに8軒の農園に車で出かけていく仕組みができて8年たちました。農業と福祉と企業はもつと連携の可能性があるのではないかと思えます。

濱田・阿部さんの実践は、香川県内の福祉施設

る取組みも広がっています。

最後に阿部さんにお聞きます。農作業の受委託をして、農家の栽培面積や所得はどれくらい増えたのでしょうか。

阿部・結果として耕作面積が広がりました。支援面積について、平成27年度は5,288aだったのが、平成28年度は減りました。ですが出来高で、コンテナや面積（a）の単位で換算できない仕事が増えています。

人数は平成27年度と比べて7,800名から11,700名に増えました。これは、東讃と中讃エリアでの大規模なネギ農家で、月曜日から土曜日まで毎日作業してほしいと依頼され、その地区で募集したら行ける施設が出ました。毎日両方でやったら10名ぐらいが、1週間で60名、1か月で300名、それが1年だったら3,600名と増えていきました。

濱田・香川県で、阿部さんの前任者にお願

(*4)

て、アンケート調査を行いました。農作業を委託した農家は高齢化しているが、障がい者が手伝いに来てくれたことではかの作業ができるようになり、結果として栽培面積が増え、売上が上がっているのです。売上は平均して1.3倍、すごいところでは売上が約10倍になった農家もありました。障がい者の賃も上がり、農作業の委託には、農福双方にメリットがあることがわかりました。

(*1) 社会福祉法人白鳩会 花の木農場は、2019年5月にAS-1 A G A P (茶Ver. 2.1)の認証を取得した。

(*2) 伊藤心クノソリューションズ <http://www.ctic-g.co.jp/>

(*3) 株式会社びんり <http://www.ctic-g.co.jp/hinar/>
なお、特定会社による作業員・生産物販売(購入)の事例については、濱田健司「農村地域における農の福祉力を活かした新たな障がい者雇用ビジネスモデル」都市企業による特別子会社および株式会社における取組み「共益総研レポート」No.10(2010年8月) 52ページを参照のこと。

(*4) 平成26年度 都市農村共生・対流総合交付金の共生・対流促進にかかる調査研究「報告書 農家・農業法人等における障害者福祉事業所との関わり」についてのアンケート調査を平成27年1月から3月に行い、回収数9件、有効回答数81件。

から見たら「何やっているんだ」ということが多々あると思います。ぜひ、福祉、企業、もしくは第三者の視点から農業を見てもらい、指摘をいただくことで、多様な人たちが農業現場で働けるようになっていくのではないかと思いますので、ご協力よろしくお願いします。
阿部：農家からいただく仕事が増えていますので、マッチングでできる施設を増やすことが一番の課題です。特に、東讃・中讃エリアに力を入れ、参加施設を増やしたいと思います。
内藤：農福連携というと、農業サイドから見ると大丈夫かなという不安ばかりが先行するようないな気があります。話を聞いてもらえれば、「企業のCSRも活用できそう」など、新しい展開が期待できる分野だと思います。労働力不足の時代ですから、農作業を分解して少しでも切り出してみると、何か興味深いことがあるかもしれない。とりあえずやってみようと考えてる農業者

7. 農福+α連携の「+α」は「妄想」(イメージ) Kt6

濱田：最後に、一人一言ずつお願いします。

中村：私たちは知的障がい者の施設から始まりましたが、今は、多種多様な障がいを持った方が就労を目的に、私たちの事業所を通して頑張っています。農業に限らず、障がいを持った方々が本当に力を出せるよう、社会づくりを一步一步進めていきたいと思っておりますので、障がいを持つ方々への理解、過去につまずいた方々の社会への受け入れの器を広げていただきたいと思います。

鈴木：私たちが特別支援学校の先生に言われたように、「そんなことをやっているから、農業が衰退するんだ」という言葉を農業現場に投げかけていただきたい。今、農業が本当の意味で変わらなければいけないときに来ています。傍

が増えると、変わっていくのではないかと思っただ次第です。

濱田：農福連携は、「農」と「福」という本来つながらないようなものがつながって、大きな化学反応を起こします。それは、いろいろなものとの出会いです。鈴木さんもおっしゃっていましたが、その出会いの中で、自分たちが変わっていくものがある。それともう一つ、楽しいんですよ。ですから、これから農福連携に関係する方は、どうかたくさん妄想してみてください。農福+α連携の「+α」は「妄想(イメージ)」です。その「妄想」が今、100%実現してここまで来ているのです。さらにそれが広がれば、私たちの暮らしや人間関係、会社でのあり方が全部変わっていきます。農福連携について知っていただき、皆さんの中でぜひ、何かアクションを起こしていただければと思います。本日はどうもありがとうございました。